

## 【1 C：正常位で結合】

レイヴンはサキュバスを押し倒して素早く正常位で結合した。

「きゃっ……、んっ……」

乳房を揉んだり、わき腹をくすぐったりしながら腰をピストンとさせると、喘ぎ悶えるいい反応が返ってきた。膣の具合も平凡なもので反撃も怖くない。攻撃も防御も大したことなく、これなら余裕をもって相手を絶頂させられそうだ。

「んっんっ……！」

顔を赤らめたサキュバスは目を閉じて必死に快楽をこらえるような表情をしていた。どうやらそれは演技でもなく本気で感じているようだった。強い快感に動きが止まっているようなので、乳首をこねくり回したり、ピストンを速めたりして、容赦なく追撃を加えていく。

「やめっ、あんっ、やめてよっ、あんっ！」

絶頂が近づいて激しい快楽がこらえきれなくなってきたのか、サキュバスは責めの中止をおねだりしてきた。赤い唇から喘ぎ声が漏れ、呼吸が荒くなっていた。

「あんっ、あんう……」

赤い口紅が妖しい輝きを放っていた。

サキュバスが恍惚とした顔色で熱を帯びた吐息ついているのを見ていると、レイヴンは魅了されてしまったかのように、唇を重ねながらセックスしたいと思ってしまった。

キスは相手の得意分野だから避けるべきだという気持ちはもちろんあったが、相手はもう絶頂に近くて息もたえだえなのだから、少しぐらいキスをして楽しんでもいいだろうという馬鹿げた考えが頭をよぎった。

（くっ……、なにを考えているんだ）

考えを振り払おうとするが赤い肉厚の唇が視界に入ると、それから目を離せなくなってしまった。またあの恍惚感を味わいという気持ちに支配されてしまい、ついには腰の動きを遅くしてサキュバスと密着し、熱い口づけを交わし始めてしまった。

「んっ！ んーっ！」

そのキスは最初からとても激しかった。互いの舌が激しくからみ合うとレイヴンはすぐに理性を失ってしまったようで、上からサキュバスの身体に覆いかぶさりディープな口づけを堪能した。

そのキスは精神的に深いつながりを得られるという錯覚をさせるものだった。このままあつけなくサキュバスを絶頂させ消滅させてしまっは名残惜しいと思ひ、挿入したまま腰の動きを完全に止めた。

愛液の溢れる膣内を動かさないまま堪能すると、ペニスにとろけるような快感が与えられた。腰を動かさない代わりにサキュバスの乳房を手で激しく揉みしだくと、その弾力と温もりがとても気持ちよくて、逆に快感をうけてしまった。

サキュバスはレイヴンの首に腕を回して引き寄せると、密着を強めながらさらに激しいディープキスをしてきた。そのキスはあまりに気持ちのいいもので陶然としてしまうと、サキュバスはその隙にカニバサミをして腰を拘束してきた。

「ちゅっ……、んっ！！」

レイヴンはそのまましばらく我を忘れてディープキスをしていた。余裕がなくなって、そろそろイかせようとピストンを再開しようとしたら、カニバサミでそれができなくなっていたことに気がついた。相手へ与える快感が極端に減ったことに気づき焦り始めたが、深く熱いキスによって意識が朦朧としていて考えることができなくなっていた。

脚の拘束を解くことができないまま、サキュバスが腰を揺り動かすと、思った以上に高められ敏感になっていたペニスの先端から我慢汁が溢れ出てきた。

「はぁんっ、ちゅっ……、じゅるるるうっ！」

近づいてきた射精に焦ったレイヴンは、目の前のキスから意識をそむけてしまったのだが、それに合わせサキュバスはさらなる口づけの追撃をしてきた。溺れるような激しい口撃に呼吸も乱され、レイヴンはキスの虜になってしまった。

「んっ！ んっ……っ！」

突入してきた長い舌が口内のあらゆる箇所を舐めまわし蹂躪すると、レイヴンは魅了されてしまって、もう目の前の唇とペニスの感触しかなくなってしまった。

手足を動かして責めようとか、体をひねって脱出しようとかいう考えは思いつかなかった。この危機的状況を打開するにはキスで主導権を奪い返すしかないと考え、口づけに意識を集中するが、そこはもうどうしようもない程の猛攻で蹂躪されていて、意識してしまうとさらに激しく興奮し、快感がわきあがってしまった。

「ふふ、気持ちよくしてくれなきゃダメなのに……」

サキュバスは相手からの責めがなくなり、精液の混じったカウパーを大量に吸精したこ

とで、絶頂の寸前から回復した様子を見せていた。

「ま、いいわ。これで終わりにしてあげる」

サキュバスは勝ち誇った笑みを浮かべると、膣圧を強くし前後に細かく腰を振るってきた。キスのことしか頭になかったレイヴンは不意の変化に対応できずに、お漏らしをしてしまった。

「ふふ……、うれしい」

サキュバスは子宮に注がれた特濃の精液に満足すると、レイヴンを抱き寄せて甘えさせてきた。精を吐き出して敗北したレイヴンは、相手の顔をぼんやりと眺めながら射精の快楽に打ち震えていた。

「自分の好きな速度で腰をふってね、ちゅっ……」

サキュバスはカニバサミを解くと、そのままレイヴンに腰をふらせてきた。レイヴンは自分の最も気持ちいいと思えるスピードで腰を振っていると、セックスの満足感も高まっていき、それに優しい口づけも重なると至上の淫蕩に何度も精液を漏らすことになった。

そのまましばらくサキュバスのお腹の上で腰をふって射精をし続け、レイヴンの意識は途絶えてしまった……。

《ゲームオーバー！》